

名 誉 会 員 追 悼



故 名誉会員 大谷 正康 君

社団法人日本鉄鋼協会名誉会員、東北大学名誉教授、大谷正康先生は、平成10年1月24日逝去されました。享年75才でした。先生のご業績を偲び、謹んで追悼の辞を捧げます。

先生は東北大学選鉱製錬研究所長、神戸製鋼所常勤顧問を歴任され、昭和49年からは12年間にわたり日本学術振興会製鉄第54委員会委員長を、昭和60年からは第13期日本学術会議会員をつとめられました。先生の多くの学術上の業績に対して、本会からは依論文賞（昭和44年、48年）、渡辺義介記念賞（昭和41年）、西山記念賞（昭和46年）、そして西山賞（昭和61年）が贈られております。他に日本金属学会から功績賞、論文賞、谷川ハリス賞等を受賞されております。

先生は本会の理事を4期8年間、また長期にわたり本会評議員や東北支部長として本会の発展に寄与されました。この他関連学協会での活躍も目覚ましく、日本金属学会会長をも勤められております。

先生は、昭和21年に東京大学工学部をご卒業後、東北大学選鉱製錬研究所助手として学究生活をスタートされ、昭和24年に助教授に昇進されました。当時の鉄冶金学は、溶液論や電気化学等を基礎にした発展途上の学問で、先生は溶鉄－溶融スラグ系で濃淡電池を構成し、各種元素の活量測定をするなど、高温の鉄鋼製錬の分野に電気化学の手法を導入するのに先駆的役割を果たされました。溶鉄中の炭素の活量係数をドイツ、イギリス、アメリカの研究者と競って測定する傍ら、相互作用係数と原子番号との間の周期的関係を見だし、その成果を昭和30年に当代碩学のSchenck教授や、Turkdogan博士らに先んじて発表されました。本研究は仙台に大谷ありと注目され、日本の鉄冶金研究のレベルと研究者層の厚さを世界に示した快挙でした。また、この当時のマグネシアを用いた固体電解質による酸素活量の測定は、その後の固体電解質を利用した鉄鋼計測の先駆と評価されました。

昭和38年に教授に昇進され、研究の領域は鉄鉱石の還元、溶鉄とスラグ間の珪素や硫黄の反応、溶鉄予備処理、溶融金属やスラグの構造や物性とさらに広がり深まりました。高炉内の珪素の移行に関して、気相のSiO₂を経由した還元機構を提唱し、系統的な研究により、当時の世界最先端を行く超大型高炉操業の確立に、基礎研究の立場から大きな貢献をされました。先生はこのような鉄鋼製錬の物理化学分野における世界的な業績により、平成4年に本会名誉会員に推挙されました。

先生は、中国東北大学名誉教授、北京鋼鉄研究総院技術顧問などをつとめ、国際交流にも力を注がれました。

先生の学問的業績はもとより、その当意即妙の話術と率直で人間性あふれるお人柄の故に、日本では勿論、外国にもファンが多く、たくさんの方々に慕われておられました。日頃より健康には気を遣われ、お元気でしたので、突然のご逝去は、返す返すも残念で、痛惜の極みであります。

名誉会員大谷正康先生の鉄鋼技術の発展に尽くされました偉大なご業績を偲び、会員一同心から追悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成10年2月

社団法人日本鉄鋼協会 会長 野田 忠吉